

パトリック ブロンテと St.ジョンズ コレッジ

——そのケンブリッジ時代

廣 田 稔

I

詩人ウィリアム ワーズワスがケンブリッジで学んで十数年後、ワーズワスと同じく St. John's コレッジで学んだ者の中にシャーロット、エミリー、アンのブロンテ姉妹の父パトリック (Patrick Brontë) がいた。『シャーロットブロンテ伝』の著者ギヤスケル夫人に伝えた彼自らの生い立ちと家族の背景は以下の通りであった。

「私の父の名はヒュー ブロンテ (Hugh Bronte) と言った。彼はアイルランド南部の生まれの人で幼い時みなし児として残された。彼は古い家柄の出であったと言われている。このことがそうであったかそうでなかったのか、私はわざわざ尋ねてみようとしたことは一度もなかった。というのも私のと同様、父の運命は神慮の下にあって、家系にではなく私達自身の努力によるものであったからである。父はアイルランド北部にやってくると、年令的には若かったがふさわしい結婚をしたのであった。父の資力は乏しかった。—それでも 2～3 エーカーの土地を借り、父と母とは精励努力によって、何とか立派な形で一家10人の子供たちを育て上げたのである。私は早くから書物への好みを示し、学校に通う数年の間そうあり続けた。16歳になった年—父が私にどのような金銭的援助をする余裕もないことを知ったので—私は私自身のために何かをしようと考え始めたのである。従って私は大衆のための学校を開くこととなった。—私はこの線で6年間続け、それから私はある紳士の家で家庭教師となり—その勤め口から私はケンブリッジへと移り、セント ジ

ョーンズ コレッジに入学した。』⁽¹⁾ (訳文中の―は原文のまま)

この回想は簡潔で細部に乏しい情報とも言えるものであるが、それは「この時ブロンテ氏は既に80歳という高齢に達していてその記憶も衰えがちであった」⁽²⁾ ことによると思われ、又、彼は目を患い既に殆んど盲目状態であったと言われる。

このような状態での回顧であったので、ブロンテ氏自らの背景については他にその若干の資料を求めるべきであろう。パトリックの両親についていま少しの情報は、A. ホプキンズによればこのように記されている。

「彼の父ヒュー プランティ (Hugh Prunty) 又はブランティ (Brunty) は小作農で、1776年頃或いはそれより少し前にボーイン (Boyne) 川河口の近くの港町ドロヘダ (Drogheda) から北部に移って来て、ダウン (Down) 州のドラムバレロニー (Drumballerony)⁽³⁾ という教区のエムデール (Emdale) に居を定めた。1776年に彼は名前がエリノア (Eleanor) 或いはエリノア (Elinor) 或いは又アリス マックロリー (Alice McClory) と様々に名付けられた若い婦人と結婚した。彼女はカトリック教徒として育っていたと言われるが、結婚に当って彼女の夫の宗教を採り入れた。彼女の夫はプロテスタントで恐らく長老派であった。というのも当時アイルランド北部では長老派がその数でカトリック及び英国国教会の両方を大いに上回っていたからである。』⁽⁴⁾

そして上記エムデールでこの小さな農夫夫妻の最初の子としてパトリックは生を受けたのである。その後20数年を経て彼はケンブリッジへ進学することとなったが、そこには彼の普段の向上心が大きな原動力であった。一家の長子としてパトリックは指導力と責任感を持っていたが、成長するに伴い、彼の思いは何とか自己の置かれた環境を変えることに努めねば将来への望みがないことを痛感していたようである。当時のアイルランド北部は経済的、政治的又宗教的諸問題に騒然とした状況であり、そうした社会的慣習の枠から抜け出すことはパトリックにとって急務であった。

「村の学校を越えた所に自ら自身を押し上げるための教育に十分な関心を持っていたのは、兄弟たちみんなの中で彼のみであった。彼の早い時期の少年時代に於て、彼の中にあの「書物に対する早くからの愛好心」の炎を燃やし、作用してそれを形成した影響力については何一つ分からない。」⁽⁶⁾という見解がある。しかし一方、キャサリン フランクは「パトリックは生涯、聖書と『天路歷程』に熱中し……乏しい賃金を削り蓄えて『失樂園』を買い求め……聖書や『天路歷程』と同様それをすべて暗記していた」⁽⁶⁾と記している。こうした宗教上、文学上の書物への愛好心が、何よりも彼を将来に於てケンブリッジの門をくぐることを可能にしたことは明らかである。実際パトリックは自ら文才を持ち、その文才は後にブロンテの姉妹たち（シャーロット、エミリー、アン）に受継がれたことは紛れもないことであった。自らの詩集『草屋詩集』の序文に記しているように、一日中詩作に没頭し、「命が続く限り味合いたいと願うほど筆舌に尽し難い喜びに満たされ、時は心地よく過ぎていった。ほとんど気付かないほどに」⁽⁷⁾と記している。パトリックにとって何がしかの収入を得る最初の仕事は、手織りばたの職工としての仕事であったと言われるが、ブロンテ氏はこのことはギヤスケル夫人への自らの手紙に於て触れることはなく、氏の手紙は16歳の時に生徒であった身から直接教師となった印象のものとなっている。ブロンテ氏が最終的にケンブリッジへ進学することとなるその後の経緯について、ホプキンは次のように記している。

「パトリックが「パブリック スクール」を開いたと語った時、彼はドラムバレロニーの教区のグラスカー ヒル (Glascar Hill) 長老派教会付属の学校のことを言及していたに違いない。そして彼が大学教育を得ようと大胆な決意を固めたのは、恐らくそこで過した6年間の間のことであった。もしも彼がこの話題をグラスカー ヒル教会の牧師アンドリュー ハーショウ (Andrew Harshaw) 師に持ち出したものであったとしたならば、大学教育に至る道は英国国教会を通してであるということに彼に助言したのはハーショウ師であったという話は、何らかの真実性があるかも知れない。この当時長老教会派はアイルランドに自らの大

学を持たなかったので、長老教会派の牧師連はしばしば少年たちにオックスフォード或はケンブリッジに入学することを助言したのである。』⁽⁸⁾

又この間の事情について *The Brontës, Their Lives, Friendships and Correspondence* は以下のように記している。

「彼（パトリック）が数ポンドを蓄えたのはドラムバリロニーに於てであり、加えて教区牧師タイ氏 (Mr. Tighe) によって励まされて、25歳の年令でアイルランドを離れてケンブリッジの St.ジョーンズ コレッジに進んだのである」と。⁽⁹⁾

パトリックにケンブリッジ進学を助言したのがハーショウ師であれタイ師であれ、このような適切な助言は将来聖職者として一人立ちをするための学位を目指そうと願ったであろうパトリックにとっては最も重要なことであった。ただ彼はそれまで長老教会派に属していたのであり、やむなきこととは言え、又どれ程彼自らの宗教上のよって立つ信条の変化を余儀なくされたかは推測の域を出ないものの、彼は長老教会派から英国国教会へとその宗教的忠誠心を転ずることとならざるを得なかったと思われる。しかしいずれにしてもブロンテ氏はそのことによって新しい家庭教師の職をタイ氏の家で得ることとなり、その職によってケンブリッジへ続く道に進むことが可能となった。

ノーマ クランダルもまたその著『エミリー ブロンテ—心理的肖像』の第一章に、エミリーの作家的資質とその性情に関して「ブロンテ氏はエミリーの実人生が主として内的なものに留まったという事実に対して恐らく無意識のうちに責任の一端を負っていた」⁽¹⁰⁾と記して彼女の父パトリックの生い立ちと経歴について以下のように記述している。

「パトリック ブロンテは1777年聖パトリック祝祭日に北アイルランド、ダウン州にあるエムデールという名の小さな村の2部屋から成る百姓小屋で生れた。パトリックはプロテスタントの百姓、ヒュー ブランティ (Hugh Brunty) とカトリック教徒のエリナー マクロイ (Elinor McCloy) の10人の子供の長子であった。彼女はブランティ氏と結婚して

プロテスタントに改宗した。少年時代、パトリックは大望心に溢れた早熟な才気の持主であった。職工として1日12時間の仕事を終えると、夜は勉学に専念した。若冠16歳でブロンテ氏はグラスカー ヒルにある土地の長老派の教会学校の教師に任命された。21歳の時、彼は既にドラムバリロニーの教区学校の校長であった。

ブロンテ氏がその後、名も無い教区学校の校長から英国国教会の牧師へと出世したのは、正真正銘の内心の決意と道徳的勇氣と学問的能力に起因していた。彼の教区の教区牧師によって励まされて、パトリックはイギリスの最も優れた子弟のための二つの偉大な大学の一つ、ケンブリッジに神学生として入学する決心をした。僅か7ポンドの金子で大学からの奨学金のあてもないままに、25歳の年に英国へと旅立ったのである。』⁽¹¹⁾

克蘭ダルはエミリーの母の出身地、コーンウォールの有名な牧師ヘンリー マーティン (Henry Martyn) 師が描いているケンブリッジ大学に於けるパトリックに関する記述は興味深いものであるとして、マーティン師がある信仰心厚い篤志家に手紙を書き送って、パトリックへの奨学金の増額をとこの若い進学者に対する資金援助を依頼したことを記している。マーティン師の手紙はパトリックの世の因襲に捉われることのない進取の気性と、いかに真剣な身の入れ方であるかを強調したものであった。

「彼（ブロンテ氏）は小生に大学進学への契機につき些かの説明を致しておりますが、それはその特異さに於て殆んど比類なきものと存じます。彼は生まれ故郷のアイランドを7ポンドの小銭を携えて出立した後、遠隔の某友人より思いがけず5ポンドの送金を受領致しております…。大学の支給によるものの他、いかなる援助もなき有様故… 牧師としての職務に役立ちたき願いによって少なからず感化を得ている由に思われます故に、英国国教会の有為の徒となるであろうことを囑望し得るところであります。』⁽¹²⁾

ところでこのマーティン師は実の所パトリックが St.ジョーンズで出会った最も親しい友人の一人となった人物で、彼自身はコーンウォールの中流の出で1797年に St.ジョーンズに自費生 (pensioner) として16歳で入学して、パトリックが入学した1802年に A.B.の学位を得て、St.ジョーンズのフェロウに選ばれていた。St.ジョーンズでフェロウであると共に、福音主義の最も優れた精神性を持つ高潔で知性に優れ、将来性ある若い人々を伝道の道へと送りこむ運動に参画していた。彼は福音書をヒンディー語、ペルシア語及び他の東洋の言語に翻訳しては、ブラジルから南アフリカ、インド、ペルシャ、小アジアへと旅し、31歳という若さで過労と疫病に冒され、夭折した St.ジョーンズの聖人ともみなされた人物であった。⁽¹³⁾ このような人物によってパトリックは将来、聖職に就く有望な人物として注目され、パトリックがいかにしてアイルランドでの貧しい状況からケンブリッジに進んできたかの細部について知ることができたマーティン師は、信仰心厚い篤志家に経済的支援を依頼する手紙を認めてやる程にパトリックの優秀性に敬意を抱いていたと考えられる。

パトリックは、マーティン師と共に19世紀初頭ケンブリッジの多くの学部生に影響を与えていたキングズ コレッジのフェロウであると同時に、Holy Trinity Church の牧師であったシミオン師 (Charles Simeon) に影響を受けていた。1799年に Church Missionary Society を設立したシメオン師は、福音伝道のために有望な若者を説いてインドへの伝道に向かわせていたのである。マーティン師がインド等へと旅にのぼっていった背景にはそのような事情によるものであったが、パトリックは福音を海外に述べ伝えるよりもイギリスの教区の牧師として働くことが自らにふさわしいものという結論を出したものである。⁽¹⁴⁾ ノーマ クランダルが引用しているパトリックのケンブリッジ進学支援のために、マーティン牧師がある信仰心厚い篤志家に宛てた手紙の宛先人は、恐らくウィリアム ウィルバーホース (William Wilberforce) という人物であったと推測される。当時経済的支援を要する色々な人々に援助支援を行っていた Church Missionary Society を含む各種の協会創立に参画し、「貧困者の社会的状況改善協会」を Sir Thomas Bernard 等と共に1796年に創設し、1803年には The Bible Society を創設して、⁽¹⁵⁾ 大い

なる社会奉仕活動に尽力貢献した人物の一人としてウィリアム ウィルバーホースは知られていた。彼はまた偉大な反奴隷運動の指導者でもあった。このウィルバーホースに宛てたマーティン師によるパトリックのケンブリッジ入学に関する学資援助への礼状が残されており、パトリックの入学時点に関して知ることの出来る貴重な資料となっている。この手紙は'Martin about Mr. Bronte. Henry Thornton and I to allow him £10 each annually.'とウィルバーホースによって裏書きがなされたものである。ここにあるように、パトリックにウィルバーホースとヘンリー ソートンとが年10ポンドずつ、計20ポンドの支援を与えるというものであった。このような支援に対するマーティン師からの礼状である。この礼状中にも先きに引用された依頼状と同一の表現箇所が認められる。

1804年2月14日 セント ジョーンズ

「拝啓—早速ブロンテ氏に対する多額の御支援のお申し出を伝えました。それと併せ、氏がこれ以上の要求を限るようと躊躇なく申し添えました。同氏は年20ポンドがあれば楽に勉学を続け得ると申し、それ以下で続け得ると申しております。…同氏は故郷アイルランドを22 (25?) の年齢で発ったのでありますが、数年間の生徒指導の後に蓄え得た7ポンドで、それ以上の何ものも所持しておりませんでした。氏はその金額を使い果たす前にケンブリッジに到着いたしました。そして遠く離れた友人から思いがけず5ポンドの提供を受けたのであります。この資を頼りにセント ジョーンズに入学する数週間を凌ぎ、以来コレッジより当てがわれるものより他に何の援助もございません。同氏が聖職にあつて有用の身となる願いがこれまで少なからぬ程度に同氏にその影響を与えているように思われますので、協会にとっての有為の徒となるであろうことを期待する理由と致します。同氏共々私は貴殿と協会理事の方々に感謝申し上げる次第であります。…」⁽¹⁶⁾

H.マーティン

II

このようにしてパトリックはケンブリッジに入学した。「1802年の10月の最初の日、25歳のアイルランド人は、ケンブリッジ セント ジョーンズ コレッジの堂々たる門をくぐり抜けた。砂色の赤毛をし、貴族的な顔立ちと物腰のほっそりとした長身の姿は大学の紳士の一人として彼をしるし出していた」⁽¹⁷⁾とは言え、彼のそのような紳士然とした様子にもかかわらず、実は彼はイングランドに到着したばかりで、大学の学部生として登録される初日を迎えていたのである。かつて詩人ワーズワスがそうであったように、sizar (特待免費生) としての入学であった。すなわち学費を納める自費生や特別研究員の世話をする代りに学費の支弁を受ける貧困学生としての入学であったのである。ホプキンスによれば「特待免費生は学費軽減の性格をもってコレッジから援助を受けたが、直に金銭を与えられるのではなかった。免費生は正確には召使としての身分ではないが、一般的に有用な存在となるという理解の下に、フェロウや自費生に明確に所属させられていた。ケンブリッジでは免費生はオックスフォードに比べれば社会的地位はより良いものではあったが、ある種の召使的奉仕をすることになっていた。免費生のもう一つの務めは大学礼拝の欠席者を記録することであった。」⁽¹⁸⁾

ところで10月1日、パトリックが学籍係に対しアイルランド訛りで名前を告げたために、学籍係は彼の名を彼の発音に従い、コレッジの入学簿に「1235番」「Patrick Branty」と記したという。そして学籍係は「アイルランド」とこの新入生の居住国を記した後、彼の発音を聞き取れなかったものと推測されるが、ついに確認を諦めて、パトリックの両親の名も、生年月日、出身地、これまでの教育歴も一切空白のままに残してしまった。⁽¹⁹⁾

その2日後(10月3日)にパトリックがコレッジ学寮内に入寮のためにコレッジに出ていくと、大学の bursar がコレッジの学寮登録簿に名前を誤って記述していたことを知り、'Branty'を'Bronte'と訂正してもらうこととなったと言う。パトリックはこのようにしてアイルランドのおぼろげな背景を持つ身分から歴史の頁の中に足を踏み入れることとなった。ケンブリッジに入学できたこと自体をパトリックの業績として今日的に十分に評価することは困

難ではあるものの、殆ど英国人のみの大学にアイルランド人として入学すること自体珍しいことであった。しかも彼は貧しい生れ育ちであったことは實際上また特異なことであった。⁽²⁰⁾

彼の Brontë という姓を取り上げて見るだけでも、上記のような有様であり、アイルランドの田舎では文字を十分に読めることが極めて稀れであったこともあり、この珍しい姓は Prunty とも Brunty とも、又 Bruntee ともいう色々な綴られ方をされており、パトリック自らが 'Bronte' と綴るまでは一貫した綴り字はなかったのである。⁽²¹⁾

「ブロンテの姓について現存するブロンテ氏自身の署名のものは1799年以前のものはなく、彼が入学許可を受けた際の署名は 'Patr. Bronte' と (ë という) 分音符号は付けていず、〔最初の赴任地〕ウェザーズフィールド (Wethersfield) では Bronté, デューズベリー (Dewsbury) では 'Bronte' 又は 'Bronté' となっており、氏がハワースに着任するまで Brontë という氏の署名は見られない。() 内筆者」⁽²²⁾

パトリックがその姓を Bronte と綴ったことに関して、Katherine Frank はその著 *Emily Brontë* の中でパトリックがケンブリッジを出て聖職を得て後、英国国教会の牧師としてハワースに到着した際にも、彼は自らの卑しい生まれを人々に知られることが忍び得なかったためでもあったことを示唆している。妻マライアと6人の子供と共にハワースに赴任してきた時、この一家の者たちは 'strangers in a strange land' 「見知らぬ土地のよそ者」であり、侵入者としてみなされたことによって自分の素性を出来るだけ隠したいという意図があったものと推測されている。元々アイルランドに於て「Brontë という姓自体が見慣れない特異な姓であり、ダウン州の全ての州記録及び教区登記簿に全く見られないものであった。イングランドにも殆ど同じようなものであった。...1799年ネルソン卿がナポリ王からブロンテ公 (Duke of Brontë) の称号を与えられていて、遠く遙かな北アイルランドの地にあって青年パトリック ブランティ (Patrick Brunty) は——祖先たちは自らオプランティ (O'Prunty) と名乗っていたのである——かの有名なネルソン

の新しい異国的称号が彼自らの姓に似通っていることで、やがて彼自らも‘Brontë’を姓として採り入れたのである。』⁽²³⁾

パトリックは22歳の年まで一時農業労働者として働いた後に、鍛冶屋や織物工として見習いとなっている間に自らの卑しい身分から身を起こして、ついにはトーマス タイ牧師の監督の下で教師としての職を与えられていたのであった。

パトリックを、将来英国国教会の任命牧師となす意図でケンブリッジ進学へと促したタイ師 (The Reverend Thomas Tighe) は、ドラムバレロニーの教区牧師であり、ドラムグーランド (Drumgooland) の教区司祭としての単なる地方の聖職者ではなく、グランドア伯爵の司祭として、アイルランドで裕福な紳士階級に属し、かなりの影響力を持つ人物であった。タイ師はパブリック スクールの名門ハロウ (Harrow) からケンブリッジ St.ジョーンズを卒業し、アイルランド国教会の牧師職に就く前はケンブリッジのピーターハウスのフェロウであった。1778年以来のドラムバレロニーの教区牧師としてパトリックを殆ど彼が生まれた頃から知り、その性格も、又真一文字の教育への熱意ある姿勢を多く見守る機会に恵まれていた。そしてパトリックが教会の牧師になる可能性ある人物と見てとっていた。パトリックは、その目標とする聖職叙任という段階に到達するために、大学を卒業しなければならず、そのための条件を満たさねばならなかった。先ずラテン語、ギリシア語に堪能となることが必要だった。アイルランドの小さな村の学校ではラテン語ギリシア語を学べる筈もなかったパトリックは、トーマス タイによって古典学を教えられた。そしてその際タイ師がパトリックの当時の‘Brunty’という姓が下層階級の姓であることからその綴りを嫌ったために、パトリックの姓の綴りを Bronte と変えることとなった事情を Juliet Barker は記している。⁽²⁴⁾ パトリックに長期間タイ師家の家庭教師を務めたことによるタイ師との深い結びつきがあったことによって、ケンブリッジ進学と後の聖職者への道が開かれたことを考慮すれば、タイ師の存在はパトリックにとってはかけがえのないものであったと察せられる。ケンブリッジの学位は将来のパスポートであり、その目的に向って邁進する姿は St.ジョーンズのフェロウにも注目される存在となっている。先に見たようなウィルバーホースにパト

リックへの学資支援に対しての礼状を送ったヘンリー マーティン師がその一人であった。又詩人ヘンリー カーク ホワイト (Henry Kirk White) は彼自らもノッティンガムの肉屋の子として低い身分の出で、パトリック同様に特待免費生として1804年4月に St.ジョーンズに入学を許可されていたが、彼自らが経済的問題を抱えて苦悩していた状況の中で、パトリックが自分よりもっと少ない収入しかないにも拘らず何とかうまく切抜けていることへの讃嘆の念を、故郷の母親に次のように書き送っている。

「僕は今日の前にコレッジの特待免費生ブロンテ氏の費用の請求書を手にしてあります。そしてそれを基にして氏自身の収支計算書を基に、僕のコレッジ費用の請求書が合計…せいぜい年12ポンド或いは15ポンドです…いくらになるのかの計算書を母さんにお伝えします。請求書を僕が借りているブロンテ氏は3年間コレッジにいる人です。彼はポケットに10ポンドを入れて〔アイルランド〕から来ましたが、友人もなく特待免費生として受ける以外のいかなる収入も手当もないのです。それでも彼はしっかり生活を支え、しかもまた品良くしているのです。』⁽²⁵⁾

パトリックはおそらく彼の最も親しい友人となった John Nunn という、同じく特待免費生と部屋を共有した。コレッジによって無料で提供された部屋であったが、大抵の部屋が調度品を備えられていたにも拘らず、パトリックのあてがわれた部屋には家具はなく、部屋を温める石炭や、夜になって勉強をするためのロウソク代も払わねばならなかった。White はベッドとはほど遠いベッドに寝る代わりに、床の上に馬の毛で作ったマットに寝たという。又同じように特待免費生であったランカスターの織工の息子であった James Wood は屋根裏部屋に住み、金を節約するために階段の燈心草ロウソクの灯りを使って勉強し、その両足をワラでくるんでいたという。コレッジの2番目の内庭東南隅にある通称「桶樽」と呼ばれていた小さな屋根裏の部屋であった。⁽²⁶⁾ このようにして当時の特待免費生はほぼ同じように経済的に窮乏した生活を強いられる状況であったように思われる。

当時の特待免費生の状況や学寮内での身分について、パトリック ブロン

テと同じく免費生として同じ St.ジョーンズ コレッジに入学した、詩人ワーズワスの置かれた状況と詩人の学寮の部屋の様子は、直接的にパトリックのものではないものの、何らかの示唆を与えてくれるものであろう。ワーズワスが St.ジョーンズのフェロウであったウィリアム クックソン師 (The Reverend William Cookson) によって馬車に乗せられ、ケンブリッジに到着したのは1787年10月3日のことであるので、パトリックの1802年10月の15年前のことであった。「1787年10月に私は叔父ドクター クックソンがフェロウであったケンブリッジ セント ジョーンズ コレッジに送られた」⁽²⁷⁾と詩人は記している。パトリックが経済的に恵まれぬ状況であったと同じように、早くして父母を失っていたワーズワスも経済的にはやはり恵まれぬ身の上であった。叔父ウィリアムはワーズワスを伴った時、その馬車にもう一人の甥ジョン マイヤーズ (John Myers) を湖水地方から連れて来ていた。叔父は到着するとすぐにこの二人の甥たちを特待免費生として St.ジョーンズに入学させたのであった。特待免費生というのは他学生の下僕を務める義務を負わされた給費生であった。給費生制度に基づいたこれ以前の奴隷状態を伴うような卑しい召使制度そのものは、ワーズワスが入学する時点には廃止されていたにも拘らず、彼らは学寮内の一番条件の悪い部屋しか与えられてはいなかった。⁽²⁸⁾ Glaham Chainey はその著 *A Literary History of Cambridge* で、1839年という後年のことながらその部屋をみせてもらった Miss Fenwick による彼の部屋についての印象的な言葉を引用している。それは「大学全体の中で最もみすぼらしく最も陰うつな部屋の一つであるに違いない」⁽²⁹⁾というものであった。

ワーズワスの部屋はコレッジの正門をくぐってすぐ最初の方庭の左隅に、当時 Pump Staircase と呼ばれていた F 階段にある、コレッジ厨房のすぐ上階の小さく狭苦しい部屋であった。この部屋そのものは1893年厨房の天井を高くするために取除かれたものの、後に元の通りに戻され、隣室と合せられて会議室とされ、現在その扉に Wordsworth Room と記されて残されている。筆者は先年コレッジのフェロウで地理学教授でワーズワスについて造詣深い Dr. Robin Glasscock の計らいによって、特別にこの部屋の中に入室することを許される機会を得ることができた。現在は会議室となっているこの

部屋の中央，マントルピースの上には詩人の肖像画，またその窓ガラスにも，肖像と詩人の詩行が色刷りで記され，その部屋からは19世紀に建てられた現在の堂々たるチャペルと，それ以前にかつて存在していたチャペル跡の礎石を見下ろすことができる。ワーズワスはこの自室について Ernest De Selincourt による1850年版『序曲』第3巻46-63行に次のように記している。最初の3行については先の拙稿で既に記してはいるものの，文脈の関係上その分も含めて引用してみたい。

福音者聖ヨハネこそ私の守護神であった。三つの小暗い方庭があり，その最初の方庭が私の起居するところ。ほの暗い片隅であった。

そして詩人は続けている。

Right underneath, the College kitchen made
 A humming sound, less tuneable than bees,
 But hardly less industrious; with shrill notes
 Of sharp command and scolding intermixed.
 Near me hung Trinity's loquacious clock,
 Who never let the quarters, night or day,
 Slip by him unproclaimed, and told the hours
 Twice over with a male and female voice.
 Her pealing organ was my neighbour too;
 And from my pillow, looking forth by light
 Of moon or favouring stars, I could behold
 The antechapel where the statue stood
 Of Newton with his prism and silent face,
 The marble index of a mind for ever
 Voyaging through strange seas of Thought, alone.

すぐその下にコレッジの厨房がブンブンとうなるような音を立て，

蜜蜂のように調子の良い響きとは言えないながらそれに劣らぬ勤勉な忙しきで、かん高く厳しい命令口調の叫び声と、そしてそれに叱責の声が混じっていた。私の部屋近くにはトリニティの騒々しい時計塔があり、昼夜を分たず十五分を打ち損ねることなく、時鐘を2度にわたって男の声と女の声で告げていた。

その鳴り響くオルガンもまた私の部屋の隣人であった。そして私の寝床の枕辺から月の光や工合よく射し込む星の光を透かして、私はプリズムを持ち黙した面持ちのニュートン像の立つ礼拝堂前室を見ることができた。

大理石に刻印されたその知性は、ただ一人不可思議な思索の海原に永遠に船出していた。

先に記したように、パトリックがワーズワスより15年後に与えられた家具一つない部屋や屋根裏の友人の部屋の状況を見れば、15年後と言えども給費生たちの学寮内で置かれていた環境その他の事情は殆ど変っては居なかったと察せられる。少なくともワーズワスの時代には給費生たちはその食事にハイ テーブルで残されていた食べ物を与えられていたという。⁽³⁰⁾パトリックと同じく免費生であった既にその名を記したヘンリー カーク ホワイトが自分たちの食事について記しているものがあり、これに関して Juliet Barker が引用した際、「全ての免費生たちはホールで食事をし、与えられる食べ物は気前よいものであった」⁽³¹⁾と述べているが、上記のような現実を考慮すれば、果してホワイトが書き残したものを、満足度という点で額面通りに理解してよいものか疑問を抱かせられる。ホワイトが実際は自分たち免費生がフェロウたちがハイ テーブルの食事で残した飲食物をたっぷり味合っているにすぎないことを、いかにも満足した食事を与えられているかのように、そのような印象を与えるために書いたものであったのかも知れない。自ら免費生であったホワイトは、自分たち免費生たちの憐れな実情を、恰も豪華な食事を与えられる身分であるかのように装い記したものではなかっただろうかと推測してもよいのではないだろうか。或いはまた、コレッジでの食事が肉屋の家庭で身分低く生まれたホワイトにとっては、これまでの貧しい生活の中からはあり得ない恵まれた状況と素直に感じ捉えてのことかも知れない。身

分の高い貴族的な上流社会の子弟からすれば、残り物的食物として惨めさと屈辱さえ感じさせるものであつただらう。学生の置かれていた身分次第で反応は異なっていたであろうと察せられる。そのような推測はともかく、この問題のホワイトの残している記述は以下の通りである。

「僕たちの食事には何一つ費用はかからなかった。そしてもしもミルクでの朝食を取り、ティーは飲まないのならば、まったく無料で生活も可能なのだ。というのもコレッジからの手当で費用の残り一切をまかなえるからなのだ。僕たちは、3時半まで昼食の席から立つことはないし、夕食の始まりの鐘は9時15分前であるのだから、ティーは殆んど余計で必要のないものであるからだ。僕たちの生活の仕方に不満を言えるものではない。というのは食卓は可能なかぎり様々な食べ物で覆われているし、フェロウたちがとり仕切るかなり頻繁な祝祭日には僕たちにワインが振舞われる。」⁽³¹⁾

ここに記された記述に見る限り、特待免費生たちの食事は極めて恵まれていたとしか他に言いようがない。しかしここで次元も事情も状況も全く異なるフィクションの世界ではあるが、一例として孤独な貧しい孤児オリバートウイストが見習修行を余儀なくされた葬儀屋のサワベリーのおかみから、たっぷりとした食事があてがわれたとしても、それは作者ディケンズが記すように、文字通り、他に誰も食べないような汚い残飯でしかなかったことを想起させられる。この際におけるサワベリーおかみの気前のよさは“profuse bestowal upon him of all the dirty odds and ends which nobody else would eat;” (*Oliver Twist*, chap.7) と記述される。コレッジが免費生たちに供する食事は、繰り返すまでもなくオリバーが食べさせられるような残飯ではないことは明白であるが、免費生たちにハイ テーブルでの残り物が与えられたとされることが事実であつたとすれば、貧しき者に残り物を供するという考え方そのものにはどこか相通じるものがあつたのではないかと思われる。因に筆者は St.ジョーンズに於けるハイ テーブルではないものの、ケンブリッジで三番目に古いコレッジのペムブルック (1347年創設) で、幸いにし

てここ十年来毎夏ハイ テーブルの正餐の席に着く機会を与えられている。そのことによって、今日行われているハイ テーブルについて多少の知識を得ることが出来ているが、その食事の質、量と共に、それに併せての果物類、ケーキ、ポート (port)、クラレット (claret)、マデイラ (Madeira) といった各種のワイン等、大変豪華な又贅沢な食事であることを考え合わせると、かつて特待免費生たちがハイ テーブルで残された食べ物を与えられていたということが現実であったとしても、そのことに対して彼らにさほど惨めさはなかったのかも知れない、と一方では察せられる。

Juliet Barker が記述するように、このようなコレッジでの生活に於いて、免費生であることによってかなりの負担を免れることができたが、それでもコレッジとユニヴァーシティとに納めねばならない費用があった。学生の身分によって貴族出身の者たちには入学に際して25ポンドに加え四半期ごとに17ポンド6ペンス、上流階級紳士階級がそれぞれ15ポンドと11ポンド6ペンス、免費生はそれぞれ10ポンドと6ポンド4ペンスという形であった。一方、入学、卒業時点での費用も納めねばならず、収支を合せる苦勞と同時に何らかの収入の手立てがどうしても必要であった。パトリックは余暇の時間に生徒たちを教えたり、学業試験に優れることによって奨学金を得たりしてその収入を得た。コレッジには当時の試験の成績記録が残されている。それによれば彼の最低の成績は1802年12月にユークリッド幾何学及び神学の試験で37人中25番目であったという。しかし大抵の学生たちがパブリック スクールの出身であったり、個人指導を受けたりしてきた者たちであった中で、このような成績を挙げて first class に滞ることができたことは、パトリックがいかに優れていたかを示すものであり、その後パトリックの学業成績は決して落ちることはなかった。⁽³³⁾ St.ジョーンズは特に福音主義教会との結びつきが強いことで知られ、どのコレッジよりも貧困学生に最も資金的に援助を行い、大抵のコレッジとは異なって、St.ジョーンズの奨学金は特定の学校や特定の地域出身の者と結びつくものではなく、パトリックにとって St.ジョーンズは、大学教育を得て聖職資格を得るに最も相応しいコレッジであった。パトリックは幸運にも3人の優れた個人指導教授につくことが出来た。この3人の指導教授は「James Wood, Joshua Smith と Thomas Catton であっ

た。3人共にかつて自ら特待免費生であった経験を持っていたので、自分たちの指導下に置かれた給費生たちの抱える困難を理解し、積極的に激励した。福音主義者であり後にコレッジ学寮長及び Vice Chancellor ともなった James Wood は、特にパトリックのために尽力した。こうした人々の指導の下にパトリックは見事な成績を取めた。⁽³⁴⁾ パトリックの学業成果を示す例としてハワースのブロンテ牧師館に2冊の立派な本が残されている。ホーマーの *Iliad* とホラティウスの *Carmina* というこの2冊は皮張りでコレッジの紋章印が押してあり、パトリックが賞として獲得したものであり、それぞれにパトリックの名前と「ケンブリッジ大学 St.ジョーンズ コレッジに於て first class を常に保ったことに対して受けた賞」⁽³⁵⁾と記されている。これは単に貧しい学校教育しか受けたことのないパトリックが、通常はパブリック スクール等での厳密な古典学を学んで始めて得ることの出来る学識を、正式には学び得なかった形での実績であり、極めて注目に値するものであった。さらにパトリックの学業の優秀性を示すものとして、1802年から St.ジョーンズ時代に種々の奨学金を得た記録が残されている。1802年 Michaelmas 学期よりパトリックはケンブリッジで1806年 Lent 学期まで在籍したが、1803年～1805年は Lent, Easter, Michaelmas の各学期在籍であった。そして1806年4月に *Baccalaures Artium* 即ち文学士 (B.A.又は A.B.) の学位を取得した。この間パトリックは1803年2月、1804年3月及び1805年に Hare Exhibition (£6 6s. 8d), 1805年夏 Dr.Goodman Exhibition (£1 17s. 6d.), 1803年クリスマスから1807年クリスマスまで Duchess of Suffolk's exhibition (£1 3s. 4d.) といった奨学金を得ているが、その総額は年£9.7s 4d であった。⁽³⁶⁾ このような奨学金に加えて、既に見たようなウィルバーホースやヘンリー ソートンによる年10ポンドずつの支援等がパトリックのケンブリッジ時代を支えたと思われる。このようにして1806年7月初め、パトリックはロンドン大司教に対し聖職志願を願い出ることとなるが、それに対して Thomas Tighe からの証明書、又ケンブリッジからの証明書を得ることとなった。1806年3月22日付のケンブリッジよりの証明書は以下のように記されている。

「キリストにより良き愛を授けられております文学士パトリック ブロンテは、神聖なる助祭職務への志願者として自らの身を捧げたき意志を私たちに示し、その目的のために同氏の良き徳性と学問についての証明書を求めております。我々ケンブリッジ大学福音主義者 St.ジョーンズの学寮長及びシニア フェロウは大学の古式かつ認証された慣例に従って上記パトリック ブロンテが1802年10月に始まり、今日我々と共に学寮に居住します間、勤勉に又規則正しく振舞いましたことをここに証明致します。さらに我々は同氏が英国国教会の教義或いは教会法規に反するいかなる意見をも信じそれを主張することがあったことを認識しておりません。その証明として我々はこの我等の主なる西暦1806年7月2日、署名及び印章を施すものであります。

J.ウッド B.D. 指導教授

W.クレイヴン Mr.

J.ペニングトン M.D.

W.ウッド B.D.

ハーバート マーシュ B.D.

トーマス キャットン B.D.

R.ブーン B.D.

A.メインウェアリング B.D.

W.ミラーズ B.D.」⁽³⁷⁾

1806年7月4日、パトリックはロンドンのビショップ パレス (Bishop Palace) の大司教秘書に宛て聖職者への志願書を申請した。それに対し8月10日ロンドン フラム (Fulham) のビショップ パレス チャペルでの助祭職任命式のために大司教秘書の許に出頭するようという知らせがパトリックに伝えられた。このようにしてパトリックは8月10日の日曜日、フラムチャペルで助祭に任じられ、同時にエセックスのウェザーズフィールド (Wethersfield) の牧師補に任じられた。これはケンブリッジ大学トリニティー ホールの計らいであったが、そのメンバーであり、福音主義者チャー

ルズ シミオンの友人であり、ケンブリッジの市民法教授であったジョセフ ジョウエットが牧師を務める教会への職であり、年60ポンドの俸給が与えられることとなった。10月の初めからの聖職者としての出発であった。着任までの期間を利用してパトリックは故郷アイルランドへ帰還するが、これがパトリックが故郷を訪れる最後の機会となり、彼は生涯二度と故郷の土を踏むことはなかった。⁽³⁸⁾

III

パトリックのケンブリッジ時代は勤勉な学徒としての日々であったが、そのような学問以外には殆どどのような活動にも従事する暇もないような日々を過すことを可能にしたのは、後年ハワースの牧師館での彼の奇異で激しい行動のエピソードを記すことによって、パトリックの特異な性情をエキセントリックなイメージで定着させることとなったギaskell夫人の言葉を借りることもできるであろう。彼女が示唆するように、「彼の強い情熱的なアイルランド人氣質が…断固とした克己主義で押し固められていた」⁽³⁹⁾ といった厳格なストイシズムによるものであったと察せられる。自己へのあまりに厳しい禁欲的規律性が日常の家庭生活の細部をも時として支配することとなったと思われ、子供たちに贈られた色のブーツを、衣装への愛着を育ててはいけないと火に投げ入れたり、ブロンテ婦人に贈られた絹のガウンを引き裂いたりしたという。憤りのあまりに絨毯を炉にくべて燃やしたり、椅子の背を鋸で切ってしまうということもあったという。不機嫌になると裏口からピストルを立て続けに発射するといったこともギaskell夫人は記している。⁽⁴⁰⁾ 但しギaskell夫人が記しているパトリック像には些か片寄りがあったと思われ、パトリックのピストル発砲に関するエピソードにも次のような背景的事情があった。ピストル発砲ということが必ずしも彼のエキセントリックな性情のみに帰因したものではなかったと思われる。当時ウエスト ライディング地方はラダイト運動によって全ての財産がひどく危険に晒されている状況であり、パトリックは恐れもなく地方並びに国の側に立つ立場を取ったために、工場労働者の間で不人気であった。従ってもしも長い距離を一人で寂し

い道を武器も持たずに歩くようなことをすれば身の危険もあったので、パトリックはいつも弾を込めたピストルを持ち歩いていたのでそれが習慣となったという。そのピストルを化粧台の上に時計と共に置いていたのである。

A.ホプキンスはパトリックがピストルを撃ち放っていたことをパトリックが恐らくケンブリッジ時代に習い覚えたものであると示唆している。銃と狩猟とは18世紀の末に流行するようになり、「当時大学に於いて許された少数のスポーツと娯楽」⁽⁴¹⁾であったので「パトリックはハウスで生じることとなった狙撃の趣味を恐らくコレッジにいる間に育てていた。」⁽⁴²⁾とホプキンスは記している。パトリックのコレッジ時代にはナポレオンのフランス軍がイングランド侵略を構え、1803年5月18日の英国による宣戦布告がなされるに伴って、ナポレオンは1803年の夏を通して侵略艦隊を集結させていたという、英国にとっての危機的状況が募っていた。この間の事情についてJ.バンカーが詳述するところによれば、1803年12月志願兵たちが募られ、463000人が兵籍に登録し、パトリックもその中の一人であった。それより先9月には大学の学生たちには個別の志願教練に出る許可が与えられていた。その翌月には学寮長初め不承不承ではあったが1日1時間の訓練も導入されている。St.ジョーンズは後に陸軍大臣、外務大臣そして首相となるロード パルマーston (Lord Palmerston) によって率いられた。パルマーstonは1804年4月4日にコレッジ入学の若冠18歳の若者であったが、その社会的身分によって、St.ジョーンズとピーターハウスの面々から成る第4軍団を担う将校候補であった。パトリックは友人ジョン ナン (John Nann) と共にこの軍団に加わり、パルマーstonの指揮下に於て訓練に参加した。パトリックは生涯、パルマーstonの下で訓練した事実をひどく誇りにしていた。イギリスはパトリックがケンブリッジで過ごした残りの期間を通して、又その後何年も絶えず侵略の脅威に脅かされたが、1805年10月21日のトラファルガー海戦でのネルソン提督の大勝利は、街中の通りや店々や家々と共にケンブリッジのコレッジのすべての学寮にもロウソクやランプが灯されて祝われたという。⁽⁴³⁾

以上のような経緯を見れば、パトリックがハウス牧師館でピストルを構え弾を発射していたことは、あながち彼自身の奇癖のみのなせる業であった

とは言い難い。当時の彼を取り巻いていた社会的状況の不穏さ、又勉学に勤しむことを除いて他に余裕すらなかったパトリックにとっては非常に重きをなした学生時代の、残された、言わば追憶の思い出がこのような奇癖とも見える行為として現れたのではないだろうか。ノーマ クレイドールはパトリックが「ギヤスケル夫人によって描かれているような残酷でサディスト的父親ではなかった」⁽⁴⁴⁾とパトリックを弁護し、パトリックがギヤスケル夫人に宛てた手紙を引用している。

「私は自分が幾分風変わりであることを否定するものではありません。もしも私が平静で落ち着いた同心円的人々の中で生きていたとしたならば、現在の私とは違った者となったことでしょう。……ただこれ以上私を怒らせて、暖炉の敷物を燃やさせてしまったり、椅子の背をのこぎりで切らせてしまったり、妻の絹のガウンを引き裂かせたりはさせないで下さい。」⁽⁴⁵⁾

ブロンテ夫人が夫と6人の子供たちを残して先立って行った時、夫人が家政婦に言った最後の言葉は「私はあの方（ブロンテ氏）が私にただの一度も怒った言葉を使ったことがないことを感謝すべきではないかしら」⁽⁴⁶⁾というものであったという。このことはブロンテ氏が情愛に欠けた人物ではなかったことを証し立てているものであり、そのことは妻を失った悲しみを、デューズベリー（Dewsbury）の牧師に書き送った彼の手紙の一節が何よりも伝えていると言えるであろう。

「優しい悲しみが私の毎日の分け前でした。—胸を押しつぶすような悲しみが時折重くのしかかりました。—そのような時には何か情愛深くはあるけれど、悶えるようなものが私の体全体に吐き気を催させるのでした。—私はどんな片隅でも彼女を失った寂しさを感じました。—彼女の思い出は子供たちのあの痛々しい片言によって絶えず呼び覚まされました。」⁽⁴⁷⁾

註

- (註1) Annette Hopkins, *The Father of the Brontës*
(Baltimore: The John Hopkins Press, 1958), p.3.
- (註2) Ellis Chadwick, *In the Footsteps of the Brontës*
(London: Sir Isaac Pitman, 1914), p.4.
- (註3) Drumballyroney とも綴られる。 *The Brontës, Their Lives, Friendships and Correspondence*, Vol.,1. (Philadelphia: Porcupine Press, 1980), p.2.
- (註4) Annette Hopkins, *op.cit.*, p.4.
- (註5) Annette Hopkins, *op.cit.*, p.5.
- (註6) Katherine Frank, *Emily Brontë* (Penguin Books, 1992), p.21.
- (註7) *Ibid.*, p.22.
- (註8) Annette Hopkins, *op.cit.*, p.6.
- (註9) *The Brontës, op.cit.*, p.2.
- (註10) Norma Crandall, *Emily Brontë—A Psychological Portrait*
(West Rindge: Richard Smith 1957), p.1.
- (註11) *Ibid.*, p.2.
- (註12) *Ibid.*, pp.2-3.
- (註13) Annette Hopkins, *op.cit.*, p.18. 参照
- (註14) *Ibid.*, p.19 参照
- (註15) *The Brontës, op.cit.*, p.3.
- (註16) *Ibid.*, pp.2-3.
- (註17) Juliet Barker, *The Brontës* (New York: St. Martin's Press, 1994), p.1.
- (註18) Annette Hopkins, *op.cit.*, p.15.
- (註19) *Ibid.*, p.1.
- (註20) *Ibid.*, p.2.
- (註21) *Ibid.*, p.2.
- (註22) *The Brontës: Their Lives, Friendships and Correspondence*, vol.1, p.3.
- (註23) Katherine Frank, *Emily Brontë* (Penguin Books, 1992), p.20.
- (註24) Juliet Barker, *op.cit.*, p.6.
- (註25) *Ibid.*, p.7.
- (註26) *Ibid.*, p.7-8.
- (註27) Herbert Read, *Wordsworth, The Clark Lectures* (London: Jonathan Cape, 1930), p.64.
- (註28) Graham Chainey, *A Literary History of Cambridge* (Cambridge: The Pevensey Press, 1958), p.89.

- (註29) *Ibid.*, p.89.
(註30) *Ibid.*, p.89.
(註31) Juliet Barker, *op.cit.*, p.8.
(註32) *Ibid.*, p.8.
(註33) *Ibid.*, p.9.
(註34) *Ibid.*, p.9.
(註35) Annette Hopkins, *op.cit.*, p16.
(註36) Ellis Chadwick, *op.cit.*, p.16.
(註37) John Lock and W. T. Dixon, *A Man of Sorrow* (London: Nelson, 1965), p.21.
(註38) *Ibid.*, pp.22-23.
(註39) Elizabeth C. Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*
(London: J. M. Dent Sons, 1960), p.31.
(註40) *Ibid.*, p.31.
(註41) Annette Hopkins, *op. cit.*, p.15.
(註42) *Ibid.*, p.15.
(註43) Juliet Barker, *op.cit.* pp.11-12.
(註44) Norma Crandall, *op.cit.*, p7.
(註45) *Ibid.*, pp.7-8.
(註46) *Ibid.*, p.6.
(註47) *Ibid.*, pp.6-7.